

ふれあい



発行所：鳥取県人権教育推進協議会（県人教）

〒680-0846 鳥取市扇町21 県立人権ひろば21ふらっと内

電話：0857(22)0578 FAX：0857(22)0593

発行者 松井 満洲男

HP：<http://torikenjinkyou.sakura.ne.jp/>

第67回 全国人権・同和教育研究大会（長野大会）の報告

昨年11月21日・22日開催された長野大会には、東北地方各県からの参加も得て、過去にない46都道府県から9437名の参加がありました。鳥取県参加者は148名でした。遠路、多くの方に参加をいただきありがとうございました。今回は鳥取県関係の報告概要等を掲載します。なお、詳細は『2015年度人権問題学習その実践 No.24』に掲載しています。

＜ 報告 第4分科会（人権確立をめざすまちづくり） ＞
 「人権ってなんだろう？肩の力を抜いて楽しく語り合おう」
 ～「用瀬町人権文化学習会」の取り組みから～

用瀬町人権文化学習会 福安

和子さん 竹内 ゆづるさん

当「学習会」は今から17年前に、「人権ってなんだろう？みんなで考えてみよう！肩の力を抜いて楽しく語り合おう」と、人権に関心を寄せる約80人のメンバーで発足。当初は「部落問題」や「自由と平等」等5つの部会体制で進めたが、部員の減少などにより、2011年“自らの人権意識を向上するとともに、偏見・差別解消に向け行動実践する力を身につける”ことをねらいにして、1つにまとめて再出発した。学習は発足時から、自分たちの意のままに計画して進めていく事ができるので、楽しく語り合いながら自己啓発にも繋がった。

【主な取り組み】

部落差別、ハンセン病、障がい者（児）、環境、在日外国人、子ども、高齢者などの問題に取り組んでおり、年1回くらいは県外視察交流学习を行っている。また、鳥取市内の人権学習グループとも連携している。人権の輪・人の輪をつなぐネットワーク誌「じんけんポケット」の発行。

最も力を入れてきたことは、ハンセン病問題。我が町での人権バンド「願児我楽夢」のコンサートの時の一曲でハンセン病問題の歌と語りの「時の響きて」がきっかけだった。♪らい予防法によって 私たちは強制的にここに連れてこられた天刑病と恐れられ 家族から引き裂かれ ここに連れてこられた・・・♪（ここに連れてこられた“ここ”ってどこ？天刑病って？）強烈なショックだった。

まもなく、我が町出身の加賀田一さんが瀬戸内海にあるハンセン病療養所に入所しておられることが分かり、1999年に訪ねた。療養所生活60数年、82歳のご高齢だったが、偏見・差別に正面から向かい闘っておられるかくしゃくとした姿に、私たちの方が反差別のパワーをいただいた。「なんとか故郷に帰っていただきたい」その思い一心で学習を重ねた。次の年「お帰りなさい！加賀田一さん」～近くて遠かった故郷・ハンセン病差別の現実から学ぶ～と題して 町民集会を開催することができた。当初、ハンセン病問題に取り組むことに対して勉強不足だからなどの理由で、反対意見もあったが、結局は多くの方々にお世話になり開催にこぎつけることができた。官民一体となつての取り組みだからこそできたことであると思っている。

実践交流する
全国の仲間



2001年11月開催の第53回全人・同教大会鳥取大会の当夜祭でのステージ発表。『(絵本) 時の響きて』の製作。この絵本は“ハンセン病を正しく理解する”ことへの一助になったと思う。

2014年の3月には、加賀田一さんの3回忌に合わせて、“いつの日にか帰らん・思いいずるふるさと”～ハンセン病問題を正しく知るために～と題した「写真・パネル展」を共催。いずれの取り組みも、私たちの学習会のみでは困難だが、地域の人権問題に関わる方々や行政などの協力や援助があってこそできたことと感謝。

【今後の用瀬町人権文化学習会】

今まで学習してきたことははっきりと目には見えないが、人権感覚を身に付け成長するための血となり肉になったことは、はっきりと感じている。多くの出会いがあり、繋がり、広がっていく。そのことが地域を変える原動力になっていると思っている。これからも、社会の出来事に関心を持ち続け、無理をしないで今の自分たちにできることを、一歩でいい踏み出してみる。ほんの少しでも動けば何かが見つかる。何かが変わる。そう思っている。年々部員も減り、取り組みも少なくなってきたが、大きなことができなくてもずっと続けていくことに意義があると考えている。継続は“力なり”そして、継続は“宝なり”。

< 質疑・討議 >

- 会場からは「発足した背景」「80名もの人がどうして集まったのか。どのような方々か。」等の質問あり。
- 熊本 思ったことをどんどん実現していくパワーにすごく感激。熊本県にも施設があり、宿泊拒否や差別電話などがあったが、ホテル従業員も学習され、一緒に闘う連帯感も生まれた。私も同じような解放教育地域連絡会をやっている。いろんな話を聞き、見ようとしなければ何も見えない。これからもがんばりたい。
 - 徳島 大島青松園に行ったとき、いざ、園に入ると心配の声が上がった。その後、里帰り運動をしたら、反対した人も交流会をした。再度、園を訪れると、握手し合っていた。続けることで理解が深まると思う。
 - 大阪 反対者にはどういう本音があるのか？報告者の姿をどう見ているのか、協力しようとしたのか？
 - 報告者 勉強不足だから反対したと言っているが本当はどうか文字にしづらい。回復者が堂々と里帰りする前例がなく、寝た子を起こして親戚が差別されたらどうする。他人家がせんことすんと言われた。他所がせんからするんだと益々燃えた。勉強して、10年後では間に合わない。振り返れば強引で、意地っ張りだったが、通した。親戚にも一軒一軒回って理解してもらった。結果、町民会館に入れなほどの人で大成功。
- (絵本の紹介) 歌をベースに絵本にしました。何も知りませんでしたので、鹿児島まで本人に会いに行きました。私は全国を回れませんが、本は全国で、副読本として使っていただきありがたいと思います。最後に司会者が「つづけること、つながることの大切さを感じた報告でした。」とまとめられた。

< 実践報告協力者(司会者)として参加して >

南部町立西伯小学校 福原 潤一 さん

長野は、島崎藤村の「破戒」の舞台として知られ、水平社運動の歴史にも名を刻む地域ですが、全人教は今回が初めてということでした。人権教育をめぐる厳しい状況の下で、関係者が力を合わせ、大会を成功させられたことに心から敬意を表したいと思います。

私は実践報告協力者の任も5年目になり、分散会の司会者の中で一番年上になってしまいました。分散会の最後の討論のまとめを担当することになり、大変緊張しましたが、討議に参加された皆さんの意見はたいへん学ぶことが多く、自分自身の学びを皆さんの前でお話することができました。

分散会討論では、鳥取県の人権教育の課題にもかかわる論議がたくさん行われました。子どもの背景に深くかかわることなく行われる「いいところみつけ」の問題点、「人肌にふれる」(ムラの人々など直接出会う)ことの大切さ、働く人の姿など本物にふれる体験が差別を見抜く感性を育てることなど……。

大変有意義な時間を過ごさせていただいたことに感謝するとともに、今回の学びを地元還元していきたいと思います。

鳥取県立倉吉総合産業高校 尾坂 紀生 さん

第3分科会(進路・学力保障)の第3分散会の実践報告協力者として3回目の参加だった。『部落差別の当事者とは誰か』という議論があり、差別の問題は誰の問題かをそれぞれが考えるきっかけになったように思う。会場に来ていた部落出身と自覚している人はもちろんだが、部落出身ではないと思っている人がどうしてそう思えるのか、また、そう思うことで自分の差別性にどう影響があったのか、そういったことを見つめ直すことが非常に大切なのだ、という意見があった。これはみんなで考え続けたいテーマだと思われた。

それにしても、「差別の現実から深くまなぶ」ということを具現化した報告がもっと出てきてほしいし、鳥取県の教職員の報告がほしいと改めて強く思われた。

とっとり震災支援連絡協議会 佐藤 淳子 さん

今年度の分科会編成は第4分科会までとなり、社会教育が「人権確立を目指すまちづくり」テーマのもと、一つにまとめられた形になりました。

その第4分科会の1分散会での実践報告協力者として関わりました。

会場である須坂市の市民集会という位置づけもあり、一日目は会場満席となりました。分散会報告内容の4本が部落問題中心ということで、現状の課題や方向性にかかる意見交換がしやすい分散会ではなかったかと感じます。

その中で、個々が抱える課題や取り組みの成果を「語る」「語り合う」ことで、それぞれの今を整理することができ、これからの一歩も見つけ出しやすくなることを実感した時間となりました。

「第13回島根県人権教育研究大会」開催される

～ 部落差別をはじめ一切の差別を許さず、自他の尊厳を自覚する優れた教育の実践を通じて、豊かな人権文化を創造し、「しまね」を「光輝く人々の美しさ」で満たそう ～

島根県は、1995年から9年間「全同教島根県同和教育講座」を開催した後、2003年に「島人教」を結成されました。事務局は山口県に近い、益田市。余談ですが、益田市は雪舟終焉の地で、鳥取から特急列車で3時間半です。

この益田市人権センターにおいて、2月10日水曜日、「第13回島根県人権教育研究大会」が開催され、約100名の参加がありました。

＜記念講演＞ 『はだしのゲンを語って30年～今ふるさと福島は』 講談師 神田 香織さん

神田さんは「はだしのゲン」「チェリノブイリの祈り」「福島への祈り」等、社会問題を題材として講談を行っておられます。圧倒的な声量と凜と響く声、そしてパパンと張り扇（はりおうぎ）でリズムを取りながら、話がはじまります。

落語は「笑い」、浪曲は「涙」、そして講談は「怒り」の話芸だと言われる。だから、民衆の怒りを代弁したい。はじめて新作を作ろうとしたとき原爆資料館で「はだしのゲン」に出合ったことをきっかけに、講談に仕上げて発表した。その時、丁度チェルノブイリの事故。そして今度はふるさと福島への事故。はだしのゲンから理不尽な立場の側に置かれた人に出会い、戦争、原爆、原発事故とつながったことを運命だと思い自分の講談で訴えていきたい。人々の無念さを考えるとどんなことがあってもしたたかに生きなくてはと思う。

愛の反対は無視だ。今、福島は報道から遠ざけられている。人権教育が根付いている西日本とそうでない地域では取り組みが大きく異なる。そのことを考えると、部落解放運動や沖縄の闘いから学ばねばと思っている。

＜分科会1 [学校教育部会]＞

「みんなで進路保障」 大田市立池田小学校 木戸 清治さん

木戸さんは学校事務職員さん。自らの体験と児童の家庭とをオーバーラップさせ、特に就学援助について学校事務のあり方を見直していけます。「保護者が学校に支払う給食費や教材費を学校がスムーズに引き落としができていない背景には、滞納しないようにと頑張っている家庭があります。そのような家庭を全職員でフォローしたい。」と池田小学校での取り組みを報告されました。



- 1 知ってもらおう（就学援助の情報を繰り返し行う）
- 2 異色（職）の二人三脚（教員と事務の情報を共有して早期対応）
- 3 お悩み相談（保護者と面談「困り具合の把握」と「自立を支援する支出改善」）
- 4 地域だからわかる情報キャッチ（民生児童委員さんとの情報交換）等

「家庭・地域・学校の三者が意識して、子どもたち一人ひとりの学びや成長を支える、これが『みんなで進路保障』である。」と結ばれました。

平成27年度「市町村人権教育行政担当者会」(県人教主催)開催

2月24日水曜日、倉吉体育文化会館において、平成27年度の市町村人権教育担当者会を開催。17市町村の人権教育行政職員・人権教育推進員など27名が参加し、討議を重ねました。三朝町の活動報告の後、3グループに分かれて意見・情報交換を行いました。

＜ 報 告 ＞ 「人権尊重社会に向けた三朝町の取り組み」

三朝町教育委員会事務局 人権教育推進員 石田仁樹さん

「知る」「気づく」「振り返る」をキーワードに、主に「学習機会の提供」「啓発活動」「意識調査」の3つの分野で活動されているそうです。

例えば「学習機会の提供」では、人権学級(小地域人権問題学習会)と名称も新たに組み直された。集落の人口減で、単一集落での人権学級開催が危ぶまれる現状のなか、真に推進に協力いただける方を得たり、各集落の会に人権学習の機会として地元の中学3年生の自主的な参加があったりした結果、住民の約1割の参加(世帯数では約24%の参加)があったという報告をいただきました。「人権学習は地域の課題を把握して企画し、広報し、繰り返し繰り返しやっていくことが大切だ。」と力を込めて語っておられました。

質疑では、中3生参加についての質問や地域課題をしっかりと把握することが大切などの意見が出されました。

＜ 3グループで意見・情報交換 ＞

- ・「合併以前の町ごとでやり方が違うことがある。」「行政組織の改革が新たな連携を生み、マンネリ打開の突破口になり得ることもある。」
- ・「やらされるという意識がある中で、住民が主体的に学ぶにはどうすればいいか」という問題で、「名称の変更」や「複数回参加者は表彰する。」「より主体的に学んでもらうために、計画段階から参加してもらい、巻き込んでいく。」「本人通知制度に取り組み、がんばりを数字で見える化する。」などの意見が出されました。



＜市町村の活動紹介＞

冊子の題名「**よう 生きて帰ってきたですわ**」

遠藤昭夫さんが語る 満蒙開拓青少年義勇隊から シベリア抑留へ

(大山町中山地区人権・同和教育推進協議会 2015年8月9日発行)

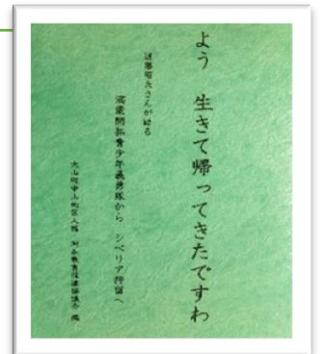
2月20日、中山生活想像館において、「中山じんけんのつどい」が開催された。インタビュー形式で上記の遠藤さんの体験が語られ、この間に、この冊子を基に作られた名和小学校6年生の人権劇が上映されるという構成であった。

冊子や話から感じた想像を絶する戦争の残酷さ悲惨さと抑留の過酷さは当然のことながら、この会で改めて「生きる」ことと「教育がはたす役割」について深く考えさせられた。

遠藤さんが、今まで誰にも話されなかったことを、70年の年月を経て伺ったことに「本当によろしく生きて帰られた。そして、よろしく生きて私たちに語ってください。」と思った。中山地区人・同推協が大切にしてくられた「**地域は宝、本物は力**」という言葉がしみじみと感じられる集会でもあった。

70年前はどこの家庭にもあったつらい戦争の話。それが、70年経つと徐々になくなっていく。戦争を風化させないためにも語り継ぎたい一冊だ。

※冊子については、県人教又は公共図書館等にお尋ねください。



『2015年度 人権問題学習その実践 No.24』を
同時に発送しております。併せてお読みください！！